

歌唱における学習過程の再考（2）

―ブータンの掛け合い歌をてがかりにした実践開発―

権藤 敦子¹，明道 春奈²，伊野 義博³，加藤富美子⁴，黒田 清子⁵，永井 民子⁶，山本 幸正⁷

要約

本論は、人が生涯にわたり音楽文化とかかわっていく土台を築くため、ブータン歌謡ツァンモの調査から得られた成果を参照しながら、音楽科の新しい方向性を見出すことを目的とした一連の研究に位置づくものである。本年度は、ラジオ放送や学校行事等、現在のツァンモのありように焦点をあて、自分なりの思いを歌で表現する意義を問い直した。とりわけ、歌の含意を共有し、なじみのある詩形や旋律を用いて、掛け合い歌による双方向のコミュニケーションを通して、自分の思いを歌で自在に伝える活動から手がかりを得て、小学校の音楽科授業における実践開発を試みた。

キーワード：ブータン，ツァンモ，掛け合い歌，音楽学習

1. はじめに

ブータンで継承されてきた伝統的な掛け合い歌ツァンモ *tsangmo* は、近代化の波の中、ここ 30～40 年の間に劇的に状況が変化し、継承が危ぶまれている。一方で、近代化が産んだラジオ放送や学校教育において、あらたな継承の形が見られる。そこでは、自分の歌を即座に伝えあって楽しむツァンモの伝統の形が維持されている。

本稿では、まず、ブータンのラジオ放送に着目する。ブータンのラジオ放送局ではリスナー参加型の番組が複数編成されており、その時間に電話をかけて参加することができる。本研究で対象とする掛け合い歌ツァンモもそのなかで取り上げられている。ラジオの特性とツァンモの双方向性が活用され、聞き手は電話を用いてツァンモを掛け合い、結果的にその範囲は全国に広まっている。各放送局の担当者へのインタビューを通して、その意図や内容、双方向的なコミュニケーションの実際を明らかにする。次に、社会文化としてのツァンモの放送と学校行事との関連性を考察しつつ、学校の学習過程への応用について探り、小学校での具体的な授業実践開発へと結び付ける。

¹ 広島大学大学院教育学研究科

² 奈良県大淀町立大淀希望ヶ丘小学校

³ 新潟大学教育学部

⁴ 東京音楽大学音楽学部

⁵ 中部大学人文学部

⁶ 新潟県小千谷市立片貝小学校

⁷ 国立音楽大学音楽学部

2. 調査について

昨年度は2014年9月27日「ツァンモの時間」(クズ Kuzoo ラジオ放送局)の放送を聴き、進行方法、参加者の地域や言語、ラジオ・パーソナリティの応唱も含む43の演唱の分析を行った(権藤他2015)。相互に共有されているツァンモの形式や旋律に各自の思いをのせて掛け合うために、多くのリスナーが能動的にラジオ放送にかかわり楽しんでいる行動から、新しい継承の可能性が感じられた。

今年度の調査は、2015年9月18日から9月25日までのブータン滞在中に、伊野、加藤、黒田、山本、権藤他で実施した。学校でのツァンモの扱いを調査すると同時に、学校、放送局、教員養成機関を中心に参観と聴き取り調査を行った。具体的には、まず、首都ティンブーから車で東へ3時間ほどの地ワンデュ・ポダン Wangdue Phodrang にあるサムテガン・セントラル・スクール Samtengang Central School において、学校行事であるツァンモ大会の取材を行った。サムテガン・セントラル・スクールは、生徒数739名、1962年創立、現在は就学前のPPクラスから10年生 calss10 までの教育課程を備えている。また、首都ティンブーでは、私立高校であるケルキ・ハイスクール Kelki High school について、学校行事としての取り組みと今年度予定されているツァンモ大会を中心にインタビューを行った。あわせて、国民的な音楽家であるジグミ・ドゥツパ Jigme Drukpa からツァンモに関する情報供与を受けるとともに、小学校教員志望の学生たちによるツァンモ実演の参観を行った。

他方、ラジオ放送におけるツァンモの位置づけを明確にするために、ブータン国営放送 Bhutan Broadcasting Service Corporation (以下 BBS) と民間の FM 放送局であるクズ・ラジオ放送についての調査を行った。まず、9月21日(月)午前9時から11時にティンブー市内のホテル(Hotel Gakyl)でツァンモその他の番組担当をしているダワ・ツェリン Dawa Tshering (男性)にインタビューを行った。ダワ氏は、2012年からBBSの正社員として勤務している。BBSにはプロデューサー部門とプレゼンター部門があり、プレゼンター部門はシフト制の勤務となる。1990年生まれ25歳、ロクジ村 Rukubji 出身、バジヨ高校 Bajothang Higher Secondary School を経て、シムトカ Semtokha にあったブータン王立大学 Royal University of Bhutan の言語文化研究所 Institute of Language and Culture Studies¹ で言語・文化研究 Language and Cultural Studies を専攻した。大学で伝統文化について深めるとともに、別の形で薬草や医学、仏教についても学んだと言う。外務省等の仕事も経て現職。高校時代は、年に一度のツァンモ・コンペティションでベストスピーカーに選ばれ、また、大学時代にもコンペティションに何度も出場、優勝したこともある。ツァンモ、ロゼ lozey (口頭で相手と詩を交し合う口承文芸)、ゾンカ語 Dzongkha のディベートに出場した経験がある。こうした経験もふまえ、番組のなかではツァンモの大切さを説いてきており、消滅しないよう放送でも力を入れてきたという。また、同9月21日(月)午前11時45分より12時30分まで、ティンブー市内にあるクズ放送局敷地内にて、ツァンモ番組を担当しているツェリン・デマ Tsering Dema (女性)とソナム・チョキ Sonam Choki (女性)に番組に関するインタビューを行った。ツェリン氏は1996年生まれ21歳、ワンデュ・ポダン出身で、本年度取材を行ったサムテガン・セントラル・スクール(当時はミドル・ハイスクール)の卒業生である。小学生の頃からブータンの伝統文化に興味をもち、学校のツァンモ・コンペティションにも何回も参加してきた。ツァンモの本もたくさん集めて読み、現在は国語研究所 Dzongkha Language Institute でも学んでいる。放送を担当するようになって2年7か月になる。インタビューに応じてくれたもう一人のソナム氏は1990年生まれ25歳、トンサ Trongsa のタンシジ村 Tangsibji 出身、タシガ

ン Trashigang の大学出身、放送を担当するようになってから2か月となる。10年生までツァンモやロゼに関心を持っていなかったが、11年生からは学校でロゼやツァンモの話聞くようになり、興味をもつようになった。放送は主としてツェリン氏が担当し、通常一人で担当するが、時々二人で担当することもある。今回のインタビューもほとんどツェリン氏が回答している。電話で声を聴いているだけではパーソナリティの姿が見えないから、と放送局まで会いに来るリスナーもいるという。

ここでは、まず、ブータンにおける放送の状況をふまえながら、ツァンモに関する番組の現在の様子と番組制作上の工夫等を担当者の発言にもとづいて整理し、そこにみられる双方向でのコミュニケーションの諸相から、生活文化から失われつつあるツァンモが放送でいかに位置付けられているのか、インタビュー内容に応じ、共通して言える内容と放送局別との内容を、適宜分けて記述する。

3. ラジオ放送におけるツァンモの状況

3.1. ラジオ放送の普及

ブータンでは、1973年 NYAB (National Youth Association of Bhutan) によってラジオ放送が開始され、1986年に国営ラジオ放送局がサービスを開始、1998年からFM放送も始まった。1999年からは、首都ティンプーで1日1時間スタジオ放送のみながら、テレビ番組も開始される。それと同時に、民間のCATVが解禁、2006年には衛星を利用したBBSの全国放送が開始、2006年には民間の新FM局であるクズ放送局も開局された(ブータンメディアファンデーション Bhutan Media Foundation 2013)。国際協力機構社会開発部(2008)では、1973年から1998年頃を「創世期」、2003年頃を「ラジオ放送拡大」期、その後2008年にかけて「テレビ放送拡大」期と位置づけている(独立行政法人国際協力機構社会開発部2008, 12)。国家開発計画として、情報の周知と民衆教育が目標として盛り込まれ、国を挙げて開発に取りくんできた。とはいえ、CATV普及による外国文化の急激な流入への危機感から1999年には規制を実施するとともに、BBSに国有の文化や言葉を中心にしたブータン国独自の番組制作の強化を求めているという(独立行政法人国際協力機構社会開発部2008 評価調査結果要約表より)。

3.2. BBSの番組編成

BBSのラジオ放送は2012年から2チャンネルとなり、ゾンカ語放送を独立させNo.2(第2放送)とし24時間放送、No.1(第1放送)をゾンカ語(国語)以外の言語である英語、シャチョップカ Shachopkha, ネパーリ Nepali による放送とした。チャンネルが一つの時代にもツァンモは短時間ながら放送されていたが、二つのチャンネルにわかれてからは、ツァンモはNo.2のみで放送されており、番組名は「ツァンモ・テンミ tsangmo thenmie (ツァンモ・シンギング)」である。水曜日の9:30-10:30と土曜日の10:00-10:30に放送され、木曜日の同時間帯9:30-10:30と、日曜日の同時間帯10:00-10:30にはロゼの時間となり、ロゼと交代で設定され、リスナーが電話で参加する番組となっている。No.2の番組全体としては、時間帯と曜日によって編成がされており、時間帯で言えば、毎日6:00-9:00および18:00-21:00は生活の時間(教育、青少年、ビジネス、文化、健康教育、宗教等)、10時台からは娯楽の時間となる。その時間帯のなかで、たとえば、月曜日だと、10:30-13:30はリスナーのメッセージをラジオ電波で送り、その間にCDの歌を流す、といった曜日による日替わりとなっている。歌番

組の時間帯である 13:30-14:00, 14:30-15:00 には、リスナーによる参加型歌番組が月・木：ジュンドラ *zhungdra* (ブータンの伝統歌謡, 仏教的な歌), 火・金：ベードラ *boedra* (チベットの影響を受けた伝統的な歌謡), 水・土：リクサル *rigsar* (インドや西洋の影響を受けた現代的なスタイルの歌謡), 日：ジャンルに拘わらず、好きなものを歌ってよい、というように設定されている。

3.3. 方言と放送

(1) BBS の場合

国語 *national language* としてのゾンカ語であれば、ブータン国内の地域を問わず情報を伝達することができるため、ゾンカ語だけで放送する No.2 のチャンネルができた。「ツァンモ・テンミ」はゾンカ語のチャンネルのプログラムのなかに入っているのです、これまではすべてゾンカ語で歌われてきたし、方言で歌うことを(ダワ氏は)考えたことはなかった。方言でも、と提案すれば歌う人はあるかもしれないが、方言で歌ってきた場合、別の人が歌い返すことができなくなってしまうだろう。

(2) クズ放送局の場合

すべてゾンカ語であり、ゾンカ語ができない人は参加もできない。

3.4. ツァンモについて(ダワ氏による)

ブータン国内では、これまでツァンモについて研究されていないと思う。カプシュー(昨年調査者らによって報告されたメラ地区の掛け合い歌)についても今日初めて聴いた。

ツァンモには綴りが2種類あり、一つは現在使われている *tsangmo*, もう1つがそれ以前に使われていた、*U-tsang, Yuetschang* というチベットの地名を語源とするものである。

この地で若い女の人がツァンモをやっていたことから、それをユーツァンと呼ぶようになったという説もある。インド等の文化が多く入る現在とは異なり、かつてはチベットとの行き来が主で、チベットからブータンに流れてくる文化が多く、ブータンとの通商上の拠点となっていたのがユーツァンという土地だったらしい。

ツァンモには、ツォム *tsom* (poem) と異なり、定まった韻律があり、必ず4行の定型詩となる。また、ポエムであるツォムは自分のことだけを語ればよいが、ツァンモは返事が必要なようにつくられるものである。ただし、わかりやすく作られることが重視されるため、絶対韻をふまなければならないと決めることはできない。また、ツァンモもロゼも歌う人がどれほど考えるか、にかかっているため、インテリジェンス次第であり、ツァンモの場合、昔からの定番のツァンモを歌う人もいれば、返答として非常にきれいに作って歌い返す人もいる。かつては、それぞれの歌詞を紡ぎ出していたため、一晩かかっても終わらないということもあったと聞く。巧みに歌を作る人同士だと延々と続けられ、誰かが間にはいって終わらせることもあった。ツァンモは自分でつくるものだった、と思われる。

3.5. ツァンモの歌詞の類型について

(1) BBS の場合

ニエン・ルー *niyen lue* (*niyen* は仲良くなる, 耳に聞こえるいいこと, *lue* は歌), ダ・ルー *dra lue* (*lue* は喧嘩, 敵) のようなツァンモの類型は意識している。ニエン・ルーだけ、ニエン・ルー, ダ・ルーで終わる, というのもかつてはあったようだが, ラジオではそういう訳にいかないのです, 終わる時

間になったらニエン・ルーで終わらせるように意識している。また、参加者もそうした形式については了解しており、最初の演唱の場合には、ダ・ルーを歌いたいが無いためニエン・ルーを歌うようにしたり、終わるときには司会者からニエン・ルーを促したりすることもある。

(2) クズ放送局の場合

厳密に決めているわけではないが、始まって3曲ほどはニエン・ルー、しかし、男女に分かれているからほとんどダ・ルーになるが、最後にはニエン・ルーにするようにしている。

3.6. 掛け合いの形式について

(1) BBS の場合

ツァンモは掛け合い歌であり、放送でのかけ合い方を説明してはいるが、ツァンモをよく知っている人もあれば、定番の曲しか知らない人もいて、電話をかけて歌うというやりとりの制約上、必ずしも（意味のつながった）掛け合いにはなっていない。また、男女の順で継続していくようにするが、電話なので男女の順番を決めることはできない。たとえば、よく電話をしてくるモンガル地方のAさんは、「私はBさんに歌います」と歌をかけるが、歌いかけられた人が放送に電話で参加する前に多数の人が電話をしてきたため、Bさんがすぐに続くわけではなく、次に歌う人がAさんに応える形にはならないが、ラジオをコミュニケーションの場として楽しんでいるようである。

興味のある人は欠かさず番組を聴いており、歌い掛ける相手もまた必ず聴くようにしている。こういうファンは、BBS放送が聞こえない場所にも、番組の放送時間になると電話をしてこることがある。初めての参加で、よく知られた曲を歌った人でも、ダワ氏はその歌をほめると、興味をもって次からも参加するようになったりする。掛け合いを活気づけるために、歌の合間にコメントをいれて工夫をしたり、時にはダワ氏自身が歌って応えたりもする。東の方で電波の状況が悪いときには、西の方から参加しませんか、と呼びかけたりもする。

(2) クズ放送局の場合

男と女に分かれているので、たまに返事がないときには「男はこう言っているけど、女から返事がないのですがいいですか」とコメントを挿んで盛り上げるようにしている。最後の結果を言うのがっかりする人もいて参加しなくなるので、途中で盛り上げることはあっても、勝敗はつけない。

ラジオ放送としての工夫は、「前の人はこう言っているけど、あなたたちはどう思いますか」のように、掛け合いを活気づけるように意識している。今後、もっと面白くするために、「誰に対して歌っていますか」「返事はどうですか」というようなコミュニケーションの取り方を工夫したいと思う。

3.7. ラジオ番組への参加者について

(1) BBS の場合

6時から6時30分に放送される子ども番組では子どもが好きな歌を歌ってくるが、3歳でツァンモを歌うこともある。

(2) クズ放送局の場合

年齢層は、15歳から30歳の人が多い。ほとんどが若い人である。おそらく、若い人はいろいろなことに興味を持ちやすいのと、電話での参加をしやすいのだと推測する（ツェリン氏）。男と女の対決が多いことも、その一因かもしれない。地域的には、メラヤサクテンからの電話が多い。テレビも

なくラジオ放送を楽しみにしているのだと思う。また、メラ・サクテンには声のよい人が多い。

3.8. ツァンモの旋律類型について

これまでの調査で最も頻出した旋律類型 A（伊野ほか 2016）でダワ氏に歌いかけたところ、そのメロディは学校の生徒も含めてほとんどの人が知っているとのことだった。また、旋律類型 C で歌っている人も多いが、歌詞によって合う、合わないが決まるため、ことばに応じて旋律を自分で選んでいる。それ以外の旋律もあるが、大学時代何度も参加してきたツァンモのコンペティションでは、旋律類型 A, B, C 以外のものはなかったように思う（ダワ氏）。

4. 文化としてのツァンモと教育実践との関連

ブータンのツァンモは、本来、小規模な共同体の中で、一対一または数人のグループ同士が掛け合うツァンモ・チェニ *tsangmo cheyni* や、グループ内での個人同士の相性を占うツァンモ・モタプニ *tsangmo motapni* といった形態で行うものだったと考えられるが、社会の変化とともに、生活のなかで歌われることはほとんどなくなっている。しかし、現在、学校の行事としてツァンモを位置づけている例が複数存在し、たとえば、学校行事におけるツァンモ大会などの特別な場では、その行いを見守る観衆が成り行きを注視し、ダ・ルーの対決場面などで機知に富んだ応酬に喝采を浴びせることもある。また、ラジオ放送の場合、「姿の見えない観衆」が存在する。番組を進めていくラジオ・パーソナリティは、そのことに配慮し、初心者と熟達者との見極めをしながら参加を促したり、応答が必ずしも順番につながらないなかで、工夫をしたりしながら番組を構成している。ニエン・ルー、ダ・ルー、ニエン・ルーのように、はじめのなごやかな挨拶➡ツァンモ合戦・戦い➡和解、といった進行の形式を多くの人々が共有し、パーソナリティもその点に配慮しながら即興で番組を進行していく。

そこには、ブータンの文化の基層にあるディグラム・ナムジャ *driglam namzhang*（ブータン人としての礼儀作法）の精神等もあるいは関係し、互惠関係の中での協働、共有を是とする心の働きもかかわっているかもしれない。「昔から“スター”はいない。みんなが同じようにわかるしできる。“自分が作った”とは言わない。それがブータンの習わしだ」²とするジグミ・ドゥッパ氏と同様の発言をブータンではしばしば耳にする。ツァンモの歌詞に含まれる仏教的な示唆や深い含蓄を人々が共有しながら相手に掛けていく行動には、韻律や4行詩としての字脚の定型だけではなく、そうした精神的支柱に支えられた共有ルールを見ることができた。

また、ラジオにおいて、リクエストに応えながらの番組構成はめずらしいことではないし、歌手の歌を聴いたり参加者がのど自慢で歌ったりといった番組も多い。学校でも、時間をかけて練習して準備をし、ステージで各クラスまたはグループで準備した演奏を披露する発表会もよく行われる。しかし、ツァンモの場合、「掛け合う」という音楽行動に焦点をあて、1時間ないし30分という枠の番組のなかでリスナーが積極的に参加し、その時その時の参加者と、いわばファシリテーターとも言えるようなパーソナリティとの生き生きとしたやりとりが行われ、多くの人々に支持を得る番組が構成されている。テレビ番組に最近見られるツイートのように参加型で同じ時間を共有するだけではなく、リスナーが次々と電話をかけて他のリスナーや自分が呼びかけた相手と歌でつながって番組そのものを作っている。

こうした形式がメディアを舞台に人気を得ている背景には、ツァンモがもつ文化やいくつかの選択可能な旋律、歌詞の定型の共有を土台としながら、自分なりの言葉や節回しで表現でき、コミュニケーションができる、という特質が存在する。時間枠が定まり、多様な子どもたちと教師によって展開される授業との相同性を考えると、表現したいけれどもどのように表したらよいかかわからない、という子どもたちの存在を意識し、教室での友だちとの学び合い、夢中になれる活動を生み出すために、こうした掛け合い歌のもつ特質を活かして新たな可能性を見出すことができよう。

5. 「掛け合い歌」の学習過程への応用³

5.1. 実践事例 (1) 《ひらいたひらいた》—小学校第1学年—

小学校第1学年の児童を対象に共通教材《ひらいたひらいた》を使って5月から9月まで間隔を空けながら掛け合いの授業を試みた(表1)。

表1 「指導計画」

		音楽科	生活科	国語科
5月	《ひらいたひらいた》 をうたって楽しむ (音楽1h)	・教材曲を覚える ・掛け歌の形でうたう		・《ひらいたひらいた》 の歌詞をノートに正しく書く
7月	《ひらいたひらいた》 の花の部分のみを変えて、 歌合戦を楽しむ (生活1h) (国語1h) (音楽1h)	・「〇〇の花がひらいた」 の部分に知っている花の名前を 入れてうたう ・お花替え歌競争をする	・教科書を使って、お花調べを する (グループで協力して一枚の 大きな紙に、調べた花の名前を たくさん書く)	・花の名前を正しくノートに 書く
9月	《ひらいたひらいた》の 旋律をつかかって、先生を 紹介するうたをつくる (生活4h 7月) (国語1h 9月) (音楽2h 9月)	・先生を紹介するうたを 表現する。 全員〇〇先生の好きな 食べ物なんだ A △△って言ったよ B 〇〇先生は～なの かな	・先生にインタビューをして (好きな食べ物、好きな勉強、 趣味、宝物)紹介ポスターを 作って掲示する	・先生を紹介するうたの 歌詞を作ってカードに書く (歌詞のパターンに言葉を 当てはめ、続きの文を考える)

5月に教材《ひらいたひらいた》を学習後、2人組の掛け合いで表現してみた。すると全員で唄った時よりも楽しい活動になった。リレーで唄いつないでいると子どもから「他の花でも唄っていいの?」という声があがった。何度も唄っていると、自然と変化を求めたくなるらしい。そこで「れんげのはな」の部分をも他の花に置き換えて唄う活動を考えた。花の名前を置き換えるだけの替え歌ではあるが、この活動を楽しむためには、花の名前を溜め込んでおく必要があると考えた。そこで生活科の時間に教科書を使って、花の名前を調べてカードに書き溜める活動を行い、その後音楽の時間に2人組で歌い合った。さらに学級全体として楽しむため、4人組で唄いつなげながら、全員と4人組みが掛け合うスタイルにしてみた。こうすることで学習の中に適度な競争と協調が共存させることが

できた。

7月の生活科で学校内の先生にインタビューをしてポスターを作る学習を行った。4人グループを作り、「好きな食べ物」「好きな勉強」「趣味」「宝物」の4つを分担してインタビューし、全職員のポスターを作成した(図1)。できた作品を掲示すると思った以上に注目され、子どもたちは大きな達成感を味わうことができた。

9月になって、「ポスターを使って先生を唄で紹介するビデオを作ろう」と子どもに提案した。すると「そんなことできるの?」という反応が返ってきた。そこで「ひらいたひらいたを使えば簡単そうだよ」と話した。すると「やってみたーい」という声があがった。1学期に花の名前を歌いつないだ経験が意欲化につながった。

まず国語の時間に文型を提示したワークシートを使って歌詞を

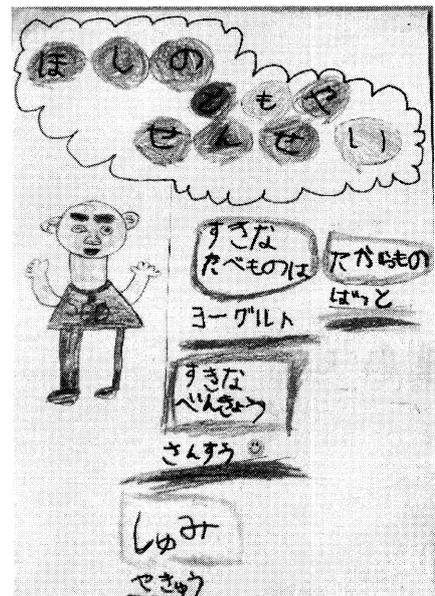


図1「生活科で作ったポスター」

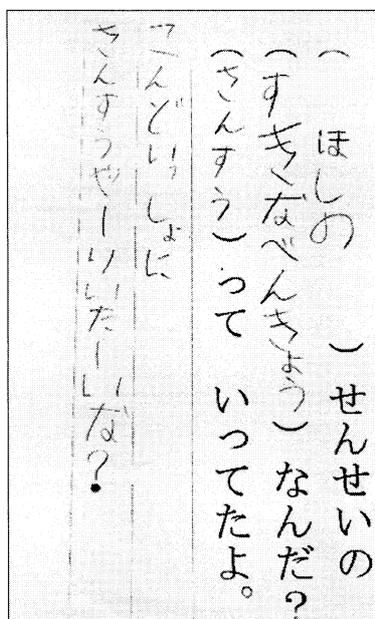


図2「国語のワークシート」

作った。この時、唄を想定しな

がら歌詞を考えた子ども(図2)と歌詞だけで考えた子どもがいた。歌詞ができたところで、音楽の時間に歌う練習をした。国語の時間に旋律を思い浮かべながら歌詞を作った子どもは、すぐに歌うことができた。しかし言葉だけを使って歌詞を作った子どもは、言葉をリズムに当てはめるのに苦労していた。そこで困っている子どもの歌い方をみんなで考える場を設定した。共同思考により高めあうことができた。一人一人が歌えるようになった後、掛け合いの形にした。自分で考えた歌詞を表現することで、教材曲がこれまで以上に身近なものになった。

この実践を通して、予め掛け合いを想定した歌詞を作って歌い合うのであれば、学年の発達段階に応じた活動の工夫をすることで、1年生であっても、比較的短時間で取り組むことが可能であることがわかった。

5.2 実践事例(2)《うさぎ》—小学校第2学年—

《うさぎ》の掛け合い歌をつくって歌う実践を開発し、小学校第2学年の児童を対象に授業を行った(表2)。本学級の児童は、男子10名、女子10名の全20名である。

第1時ではまず、授業前日に観測されたスーパームーンの写真を見て、お月見の話をしながらか《うさぎ》の歌を聴いた。そして、《うさぎ》を歌ったのちに「どうしてうさぎは十五夜お月様を見てはねたのかな?」と問いかけると、児童は「お月様にいた時を思い出して嬉しい気持ちになったから」「楽しい気分になったから」と答えた。そこで、「みんなは跳びはねたくなるほど好きなものや楽しいことってあるかな?先生はこんなものを見て跳びはねたくなるよ」と語りかけ、児童全員対授業者で掛け合い歌を歌った(譜例1)。児童らは、身体を動かしながら授業者に歌いかけることを楽しんでいった。

最後に、児童がそれぞれ歌いたい自分の好きなものを発表し、授業者がそれを旋律にのせて歌った。

表2 《うさぎ》実践の概要

第1時	①《うさぎ》の範唱を聴く。 ②《うさぎ》を全員で歌う。 ③教師に掛け合い歌を歌いかける。 ④歌詞を考えて次時への見通しを持つ。
第2時	①教師に掛け合い歌を歌いかける。 ②全員対一人で掛け合い歌を歌う。 ③ペアで掛け合い歌をつくって歌う。 ④つくった歌を発表する。

(児童) (教師)

せんせ せんせ なに見てはねる たのしいダンスを見てはーねる
おいしいおにくを見てはーねる

譜例1 児童全員と授業者の掛け合い歌

第2時では、始めに前時同様、児童全員対授業者の掛け合い歌を歌った。その次に児童全員対児童一人で掛け合い歌を歌った。次に、ペアになって掛け合い歌をつくった。ペアで1枚のワークシートを書いたら歌い、歌えたら歌いかける側と答える側を交代して、どんどん新たな掛け合い歌をつくって歌うという方法で、児童はたくさんの掛け合い歌をつくって歌った(図3)。

「うさぎ」でかけうたをしよう!
名前() ()

なにを見てはねる?
こたえる ひと

見てはねる
こたえる ひと

おなまえはニホニ
おいしい○○○○○○○○ かわい○○○○○○○○
だいき○○○○○○○○ すすな○○○○○○○○
たのしい○○○○○○○○ かっこい○○○○○○○○

- ・かわいい子いぬを
- ・かわいいハムスターを
- ・かわいい赤ちゃん
- ・すきなテレビを
- ・だいきインコを
- ・たのしいサッカーを
- ・かっこいい○○(友達の名前)を
- ・きれいなお月様を

見てはねる
こたえる ひと

図3 《うさぎ》ワークシートと児童が歌った掛け合い歌の例

リズムによって即興的に言葉を唱えながら掛け合いをする遊びを、発達段階をふまえて1学期から継続的に行っていたため、スムーズに即興的に歌を掛け合うことができた。授業後には自閉的傾向のあるA児や多動のB児が、休み時間に太鼓をたたきながら友達に「○○ちゃん○○ちゃん、何見てはねる?」とどんどん歌いかけていく姿も見られ、休み時間と授業の活動の往還がうまれていた。

5.3. 実践事例(3)《ソーラン節》—小学校第4学年—

《ソーラン節》の掛け合い歌をつくって歌う実践を開発し、小学校第4学年の児童を対象に授業を行った(表3)。本学年は、C組が40名、D組が39名であった。

表3 《ソーラン節》実践の概要

第1時	《ソーラン節》を聴いて、歌われている場所や場面を考える。
第2時	《ソーラン節》を歌い、自分たちの歌声との違いや歌詞について考える。
第3時	①《ソーラン節》の替え歌「自己しょうかいソーラン」を聴いて、何の教科の先生か当てっこをする。 ②「自己しょうかいソーラン」を一人で作って歌う。
第4時	《ソーラン節》にのって先生に「質問ソーラン」を歌いかけ、掛け合い歌を歌う。
第5時	ペアで《ソーラン節》の掛け合い歌を作って歌う。

第3時では、掛け合い歌をする前の段階として、ワークシートを用いて「ソーラン節」の歌詞を自分で作って歌う活動を設定した。児童は「七七七五」を記したワークシートの表に沿って「○○○大好き」「わたしや○○○○」など自己紹介をテーマに歌詞をつくっていった(表4)。

表4 児童が作った「自己しょうかいソーラン」

五 (名前)	七 ぼくの 名前は	七 水泳と くいだ	七 サッカー 大好き	五 バラバラ になる	七 たくさん すぎて	七 パズルが たくさん	七 ぼくの 部屋には	五 ピッチャー フライ	七 カキンと うっても	七 ど真ん中 のたま	七 バッター (名前)	五 いつも する	七 あねと けんかを	七 五人か ぞくで	七 私かぞ くは	五 だけど いいんだ	七 マイペ ースだよ	七 絵画と くいよ	七 おしゃ べり大 好き
-----------	-----------------	-----------------	------------------	------------------	------------------	-------------------	------------------	-------------------	-------------------	------------------	-------------------	----------------	------------------	-----------------	----------------	------------------	------------------	-----------------	-----------------------

そして、第4時では伴奏にのって、「七七」で授業者に質問し、「七五」で歌い返す形式で掛け合い歌を歌った。たくさん児童が挙手をして授業者に歌いかけ、例えば「(児童)先生身長何センチなの?」「(授業者)わたしや身長162センチ」「(児童)先生ペットは飼っていますか?」「(授業者)残念ながら一匹も飼っていない」などの掛け合い歌があった。児童が「先生テスト何点ですか?教えてください国語のテスト」と歌いかけてきた際には、他の児童から「(歌詞が)長い!」というつぶやきがあり、学級全体で「長くても歌に合っていればいい」という気づきを得られた。そこから、「七七七五」で歌いかけてくる児童が増えた。

最後の第5時で、児童同士のペアで掛け合い歌を行った。本時でもワークシート(図4)を使用した。いきなりペアで即興的に掛け歌を歌う「いきなり即興にチャレンジ!コース」と、歌詞を考えてワークシートに書いてから歌う「すこしじゅんぴして即興!コース」を設定し、児童が意欲や技能に応じてつくる方法を選択できるようにした。すると、ほとんどの児童が「すこしじゅんぴして即興!コース」を選択していた。しかし、たくさん掛け合い歌をつくっていくうちに、ワークシートを使用せずに即興的に歌う児童が増えていった。

手掛かりにしながら、その定型を活用して自在に歌い替える仕掛けを学習に埋め込むことによって、「掛ける・働きかける・かかわる」という児童相互のかかわり合いが生み出されたことである。同時に、「掛け合う」という活動に夢中になることで、協働が生まれ、競い合うなかで習熟し、開放され、自在に歌を歌うようになると同時に、学びをつなぎ、関連させることができた。

7. おわりに

掛け合い歌は、ブータン、ラオス、中国、奄美諸島、秋田県等、アジア各地にみられる。また、歴史的に見ても記紀歌謡にすでに記録が残されている。「歌う」という行為の本質の一側面を、それらの豊かな実践からうかがい知ることができる。掛け合い歌の文化を掘り起こし、そのメカニズムや実践から学ぶことによって、他者とのかかわりを促す学びを仕掛け、他者とかかわり、教室にいる子どもたち一人一人の学びの質を高めることができる、という仮説のもとに進めてきたが、今回の実践を通して、その可能性の一端を検証することができた。ありのままの文化から学び、歌唱における学習過程の再考を引き続き行うことで、学校における歌のありようを変えていくことも可能である。

注

- 1 2011年にトンサに移転。
- 2 2015年9月22日にティンブーのホテルで筆者らが行ったジグミ・ドゥッパ氏へのインタビュー内容による。
- 3 永井(5.1.)、明道(5.2.)が本年度担任する学級、および明道(5.3.)が昨年度音楽担当教員として実践した内容についての授業者自身による報告。5.の報告と6.の考察は2014年9月に行われた秋田県横手市の金沢八幡宮伝統掛唄大会に手掛かりを得て開始した共同研究の成果であり、日本音楽教育学会第46回大会の共同企画「掛け合い歌の教育学Ⅱ」(2015年10月4日：於宮崎)において口頭で発表した内容にもとづいている。

参考文献

- 伊野義博, 黒田清子, 加藤富美子, 権藤敦子, 山本幸正, ツェワン・タシ, ペマ・ウォンチュク 2016「ブータンの遊び歌ツェンモー—学校教育における伝承の取り組み」『新潟大学教育学部研究紀要』第8巻第2号, 印刷中。
- 権藤敦子, 伊野義博, 黒田清子, Pema Wangchuk 2015「歌唱における学習過程の再考—ブータン歌謡ツェンモの調査をてがかりに—」『初等教育カリキュラム研究』第3号, pp.23-35.
- 独立行政法人国際協力機構社会開発部 2008『ブータン国国営放送支援プロジェクト終了時評価調査報告書』
http://open_jicareport.jica.go.jp/pdf/11965910.pdf (2015.10.22 参照).
- ブータンメディアファンデーション 2013「Radio」<http://www.bmf.bt/media-in-bhutan/radio/> (2015.10.25 参照)

謝辞

調査に際して貴重な証言をいただいた方々、実践開発に協力してくださった方々に心より感謝申し上げます。なお、本研究は、JSPS 科研費 26301043 の助成を受けたものです。

Reconsideration of the Learning Process in Singing (2): Development of Lessons Referring to Singing Dialogues in Bhutan

Atsuko GONDO¹, Haruna MYODO², Yoshihiro INO³, Tomiko KATO⁴,
Kiyoko KURODA⁵, Tamiko NAGAI⁶ and Yukimasa YAMAMOTO⁷

- 1 Graduate School of Education, Hiroshima University
- 2 Oyodo-kibogaoka Elementary School, Oyodo-cho, Nara
- 3 Niigata University
- 4 Tokyo College of Music
- 5 Chubu University
- 6 Katakai Elementary School, Ojiya-city, Niigata
- 7 Kunitachi College of Music

Abstract:

To establish a foundation for people to remain involved in musical culture throughout their lives, we sought to find new directions for music lessons at school, referring to the results of a field survey of the Bhutanese *tsangmo* singing dialogue. In this study, we focused on the present state of *tsangmo* in radio broadcasting and school events. After referring to Bhutanese singing culture, we applied its dialogue style in music lessons for the lower grades in primary schools. By sharing the meaning and using familiar forms of the song text and melody, children were able to communicate with each other and showed the capacity to develop new learning processes in the playful singing dialogues. This approach may offer us a key to reconsidering the free expression of one's feelings through singing.

Key words: Bhutan, *tsangmo*, singing dialogue, music learning